

自己評価報告書(最終報告)

報告者

特別支援教育専攻／倉橋
誠一

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

主担当である主免教育実習事前・事後指導において

- ①これからの教員に求められる資質能力（使命感、教育的愛情、専門職としての知識・技能、総合的な人間力）を理解させる。教育実習前には学生の知識・技能等を確認（質問紙）し、場合によっては個別指導の機会を持つ。事後指導では、教育実習での授業実践を振り返り、学生間で共有する。
- ②一斉授業の形をとるが、内容によっては小グループに分かれ話し合いの場面を設定する。
- ③出席、レポート、自己評価表、質問紙等により総合的に評価する。

2. 点検・評価

- ①事前指導で「教育場面考動質問」を実施し、学生の教育場面における知識・技能の確認をした。そして、その結果を学生に開示し教員としてあるべき考動について学生が考える時間を設けた。次年度は「教育実習参加自己検定(仮称)」として実施する予定である。
- ②グループ活動を取り入れたことで授業に対する取組が能動的となった。
- ③出席、レポート、自己評価表、質問紙等により総合的に評価した。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教職に対するあこがれを抱き入学した学生の気持ちを維持できるよう、教師のすばらしさを発信していきたい。そして、学習や実習を通し、自分の教師への適性を判断できる機会を与え、自信・確信を持って採用試験に臨めるようにさせたい。しかし、すべての学生が教師に向いているとは限らない。これは能力の問題ではなく、向き不向きの問題である。自分の進むべき道で迷っている学生には、自らの判断で適切な進路決定ができるよう支援していきたい。

動作訓練に興味のある院生に訓練会を紹介し、体験活動の機会を与えたい。

2. 点検・評価

教育実習期間中(主免・副免・特別支援)、ほぼ毎朝附属校に出向き、実習生の特に体調面について観察し、体調の悪い実習生には直接話を聞いた。また、実習担当教師から実習生の様子について聞き取り、気になる実習生についてはさりげなく声をかけ実習生の側から相談を持ちかけられる雰囲気を作った。また、帰宅時にはできるだけ附属校の各教科準備室に顔を出し、実習生の表情を観察した。途中くじけそうになった実習生もいたが、全員無事に実習を終えることができた。

動作訓練会では参加した院生にとって有意義な研修の機会となるよう配慮し、2名の院生が1年間継続して参加することができた。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

支援学校で実施されている動作訓練会(1/月)に参加し、SVの指導の下で動作法の技能の習得に努める。また、臨床動作法の研修会、学会に参加し、臨床動作法の今の流れをつかみ、主流となっている技法・理論を獲得したい。

教育実習の成績評価において附属小学校と中学校で評価基準に違いがある。そのため、幼・小・中・特支学校で評価基準の在り方について検討していく。

2. 点検・評価

徳島心理リハビリテーション研究会主催の毎月の動作訓練会と夏の集団集中訓練(3日間)に参加し、臨床動作法の理論と実践の習得に努めた。また、日本臨床動作学会主催の第24回臨床動作法研修会(9時間)にも参加した。

実地教育分野では、協力校での成績評価の在り方について検討し、日本教育大学協会四国地区研究集会にて連名による実践報告をした。実習参加要件では「主免教育実習参加自己検定」の試案を作成した。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

実地教育専門部会や教員養成モデルカリキュラム研究開発委員会の会員として積極的に大学運営に参画する。また、実地教育の内容をより充実させたい。

2. 点検・評価

実地教育専門部会や教員養成モデルカリキュラム研究開発委員会(評価基準・評価方法開発協議委員会)の会員として積極的に会議に参加し、報告書に執筆した。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

教育実習での関わりが多いため必然的に附属学校とは連絡を密に取る必要がある。その中で、実習生に関する情報・問題を共有し、きめ細かい、統一性のある指導・評価につなげていきたい。そのために附属校に出向き、実習担当教師や管理職等との信頼関係を構築したい。

2. 点検・評価

附属校園とは現場に出向き緊密に連絡を取り合い教育実習の運営について連携を図った。徳島心理リハビリテーション研究会主催の訓練会や夏の集団集中訓練に参加し肢体不自由児や発達障害児の動作の改善や行動の変容に寄与した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)